# 博覧会協会との「協議」の感想

7 日に夢洲懇談会が博覧会協会と「協議」を行った。私が「進行役」を務めたので、感想めいたことを記録しておきたい。

夢洲懇談会は 7 月 27 日に協会に質問書を提出し、9 月 27 日に回答書を受け取った。質問事項は、1 事業の進捗状況と課題について、2「大屋根」建設とアクセス不足、3 土壌汚染問題―夢洲 1 区、4 万博工事に関連する労働問題、5 その他。万博をめぐる動きが変化するなかで再質問を送り、協議の日を迎えた。

協会から協議の時間は 60 分と指定されたので、再質問の回答を中心に質疑することにした。協議結果の詳細は、夢洲懇談会のプログなどで紹介されるので、会場建設費の 500 億円上振れについてだけ書いておく。

会場建設費が 2350 億円に増額されたことについて。増額の内訳は、物価上昇 527 億円、工事費見直し縮減でマイナス 157 億円、予備費 130 億円、差し引きで 500 億円増。350 億円の「大屋根」リングについて規模縮小などを質問したが、協会からは「床の仕上げの工法やエスカレーターを一つ減らす、展望デッキをとりやめるといった変更はしてきたが、規模縮小など抜本的には変わっていない」との回答。会場建設費にはリングなどの撤去費も含まれている。

杭打ちについても質問したが、パビリオンはなく、リングのみが杭打ちとなる。杭は鋼管で 50m、リングの 3 割程度を占める。万博終了後は杭を抜く。抜いた杭は産廃処分で適切に処分する。

試される叡智
2005年愛知万博
リレーインタビュー
山田 明さん 50
規模を縮小すべき
イベントで地域活性は古い

「大屋根」は当初は計画になかったが、基本計画策定の段階で新たに付け加わった。2020 年 12 月に会場建設費が 1250 億円から 1850 億円に 600 億円増となったが、その 6 割近くが「大屋根」が占めた。今回、会場建設費がさらに 500 億円上振れするが、「大屋根」など万博施設の規模縮小も含めて事業費見直しがされていると考えたが、規模縮小について検討すらされていなかった。

写真は読売新聞 1999 年 9 月 6 日朝刊「試される叡智 2005 年愛知万博」。まだ若かった頃 50 歳の写真だ。目が鋭かった。「想定入場者 2500 万人にこだわらず、規模を縮小すべきだ」と提案していた。

大阪・関西万博は準備が大幅に遅れ、開催中止・延期を求める声が急拡大している。せめて「大屋根」などの規模を縮小するべきでないか。協会職員は交代が激しく、与えられた仕事をこなすだけのようだ。短時間の協会との協議の率直な「感想」である。

（2023 年 11 月 11 日）